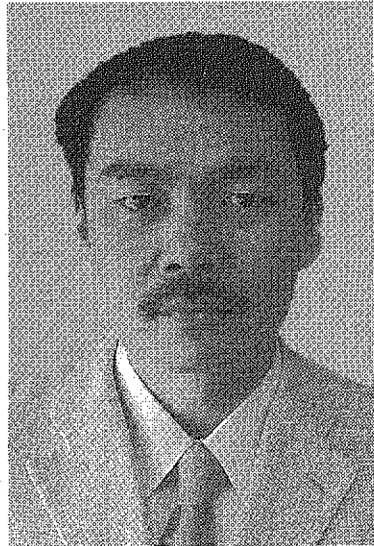


有識者25人の提言

日本が進むべき方向

「コンクリートから人へ」、民主党の大きな方針として繰り返されているこの台詞(せりふ)は、なんと誰の耳にも心地よく響くせりふなのだろう。人と対比されたとき「コンクリート」は無機的で冷たく、人間の幸せや豊かな暮らしからは縁遠いものがイメージされる。一方で、コンクリートと対比される「人」は有機的で暖かみがあり、庶民の豊かで幸せな暮らしがイメージされる。おそろしくはこうした「イメージ」は、小さな子どもに至るまで万人が十分に共有できるものである。しかし、単純な「イメージ」のおおよそに落とし穴が隠されているように、このせりふにも、大きな落とし穴が隠されていることに今の国民はどれだけ気付いているのだろうか。

言うまでも無く「コンクリート」が表象するダムや道路、空港・港湾は、いずれも「人」のためのものである。ダムは



京都大学大学院工学研究科都市社会工学専攻教授

藤井 聡氏

国民の豊かな生活を真に慮る政治

人命を、道路は人々の暮らしを、空港と港湾は人々が住まう地域の活力のため有効に活用され得るものである。この点を踏まえるなら、やみくもに「コンクリートから人へ」なるスローガンを叫び続けるのではなく、「コンクリートへの投資と人への直接的な投資のいずれが人と社会を真に豊かにするのかを、その場その場で考え続けるべきなのだ」と叫ぶべきなのである。そしてその基本的な方針の下、公共事業費の削減のみならず増強の可能性も見据えた具体的議論を、それぞれの地域で重ね続けていくべきなのである。

無論、その方針を叫んだとて、全国民がその真意をすぐに理解するとは限りない。しかし仮にそうであったとしても、そしてそれゆえに多くの国民に批判されることがあったとしても、それを叫び続けることこそが、国民の豊かな未来を慮(おもんばか)る真の政治の姿であるに違いない。少なくともしばらくは政権の座に鎮座し続けるであろう民主党政権には、そうしたあるべき真の政治を実践する精神力と実践力を携えられんことを、切に願いたい。